

Forming Community in James Joyce's Works: The Recurrence of Classical Themes and Visual Culture

岩下, いずみ

<https://hdl.handle.net/2324/4784373>

出版情報：九州大学, 2021, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

氏 名 : 岩下 いずみ

論 文 名 : **Forming Community in James Joyce's Works:
The Recurrence of Classical Themes and Visual Culture**
(ジェイムズ・ジョイス作品における共同体形成ー古典テーマの反復と視覚文化ー)

論 文 要 旨

本研究ではジェイムズ・ジョイスが古典そのものではなく、近年の視覚文化作品を通して古典を作品の下敷きにしたことを、複数のジョイス作品と近年の視覚文化作品を照合しながら論証していく。さらに従来見られた古典テーマの反復について見過ごされてきた要素を再検討する。対象とするのは *Ulysses, A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) (以下 *Portrait*) に加えて、短編集 *Dubliners* (1914)、ジョイス唯一の戯曲 *Exiles* (1918)以上の四作品である。この検討によって、ジョイス研究における古典の位置を新たにし、ジョイスにとっての視覚文化の重要性について明らかにする。さらに、古典テーマに触れ共通体験を得ること、さらにそれを反復した視覚文化作品を通して共通体験を深めていくことによって、人々の間で共同体の礎から新たなる共同体形成がなされることを論証する。

共同体形成は、特に *Ulysses* 結末に示唆される血縁によらない家族に示唆される。*Ulysses* で描かれる一日で Leopold Bloom は芸術家志望の青年 Stephen Dedalus と出会い、Stephen を息子のようにとらえ始めると同時に、彼を妻 Molly に紹介して三角関係を結ぶことを思い描く。この奇妙な、ある意味での家族関係、血縁によらない共同体が *Ulysses* で示唆される。本研究では *Ulysses* と合わせて、こうした家族関係の萌芽的示唆、寛容が見られる *Exiles, Dubliners* (特に “The Dead”) についても考察し、ダブリンを舞台とした作品において、ヨーロッパ大陸を視野に入れた新たな共同体の形成をジョイスが模索したことを明らかにする。*Portrait* では上記のような共同体形成よりも、芸術家志望の青年 Stephen が組み込まれつつあるアイルランドの共同体のあり方とそれに対する彼の捉え方、そしてその後のアイルランド離脱、すなわち共同体からの脱却が描かれる。この共同体は、ジョイスの言葉を借りるなら「麻痺 (paralysis)」の状態にあり、未だアイルランド大飢饉の悪夢から覚められず行き詰っている。Stephen はアイルランドという共同体のみでなく、ヨーロッパ大陸を視野に入れた観点の端緒を見せる。このことは、歴史と場所を超えた芸術家同士をつなぐ糸となり、Stephen が示す特徴的な視覚によって示される。

以上の内容によって、ジョイスがダブリンという特殊性の中でヨーロッパ大陸古典の普遍性をどのように昇華させたかを論証する。その論証において、自分が生きた時代のダブリンに古典を収斂させ、それ以前の文学やこれに類する文化を自分の作品にジョイスが集約していることの意義を考察する。ジョイスは若くしてダブリンを離れ、ヨーロッパ大陸にいながら常に作品の舞台をダブリンにした。ダブリンを体感しながらありのままに描くのではなく、自身の記憶や多方面からの緻密な情報収集に基

づいて、いわば「もう一つのダブリン」とも言える都市を描いた。古典テーマの反復はジョイスのアリズムにも関係し、モダニズムとポストモダニズムの橋渡しの特徴にも連携し、ジョイス作品に見られる文学・文化の収斂と解放というべき意義につながっている。

さらに、ジョイスが新たな共同体の形成を提示したことによって、未来への視座を示し、また未来を見通したことを結論づけたい。古典テーマの反復によって、ジョイスは過去から彼の時代までを作品に封じ込めた。この点から、古典とジョイス作品を重ね合わせると共に、ジョイス作品の開かれた結末によって、ジョイス作品独自のテーマ、古典という形式に込められた新たな共同体のあり方を読み取ることができる。ジョイスは開かれた結末によって今後の新たな共同体形成を示唆している。前述した *Ulysses* はその典型であり、主人公 Bloom はユダヤ性を持ちそれ故にダブリンで孤立する存在だが、血縁を持たない Stephen と関係を築こうとする。血縁を超えた共同体形成の示唆は、ジョイスの晩年に台頭するナチズムのユダヤ人迫害を超えた、ヨーロッパ大陸における人類共生のあり方をも見はるかしている。

この論文の章立ては、ジョイスの作品発表の順番に列挙される。第1章では *Dubliners* 所収の短編“Grace”で描かれるマジック・ランタンを介して議論を進める。第2章は同じく *Dubliners* 所収“Eveline,” “A Little Cloud,” “The Dead”について、家族の肖像写真を通して共同体を考察する。第3章は *Portrait* で描かれる Stephen の芸術家としての成長を、モダニズム下の芸術家の一形態「遊歩者」の概念から読み解く。第4章は芸術家の原型である鳥占い師から連綿と続く芸術家の特質を、Stephen のアイルランド離脱の決意に至るまでと共に検討する。

第5章では、*Exiles* への Percy Bysshe Shelley、Shelley 作 *The Cenci* からの影響、また *The Cenci* 原作映画からの影響を、ジョイスの映画館事業と共に考察する。第6章は *Ulysses* における劇作品 *Leah* や写真を通して親子間の継承に焦点を当てる。

以上の考察と論証によってジョイス作品を再検討し、従来の研究手法・観点とは異なるアプローチで視覚文化を介して古典テーマの反復、新たな共同体形成に光を当てることが本研究の目的である。視覚文化、古典テーマはすでにジョイス研究で一角を形成しているが、これまでに触れられてこなかった視覚文化との関連に注目し、ジョイス研究に新たな論点をもたらす。以上によって、視覚文化研究と古典テーマ反復を組み合わせることで見通すことによって、従来なかった観点からジョイス作品の共同体形成に新たな知見を見出している。